

マダガスカル島のバオバブ —浜名湖花博覧会の展示まで—

日本編

蟹江 康光

「浜名湖花博覧会の展示まで—マダガスカルで」では、「バオバブ」、「私とバオバブ」、「ムルンダバで」、「サイクロンの跡を見る」、「首都アンタナナリブで」、「搬出作業を再開」を報告した。展示用のディディエバオバブの樹幹は冷蔵コンテナに詰められ、3月10日にマダガスカルのトアマシナ（タマタブ）港を出航し、インド洋を越え、シンガポールで積み替えられて清水港へ向かっていた。

■マダガスカル研究懇談会で報告

2004年4月3日にマダガスカル研究懇談会が、京都大学で開かれた。私は、タイムリーな話題の一つとして「マダガスカルのバオバブ—浜名湖花博覧会展示まで—」を報告した。報告の反応は賛否両論様々であった。（この報告の内容は<http://homepage.mac.com/okinmebis/>に掲載してある。）



展示用に選定した幹の直径2.2mのディディエバオバブの倒木。実際に展示された部分の長さは1.6m。

■バオバブ清水港へ到着

ムルンダバのバオバブは、冷蔵コンテナに詰められて1ヶ月の航海の末、5月4日に清水港へ到着した。関係者が見守る中、コンテナを開けると、保存状態は良好であった。そして、バオバブ特有の芳しい臭いがした。この時の様子は報道各社によって華やかに報道された。この日から展示オープンの6月20日まで、大きさ・水分・重量などが一般的樹木と異なる、バオバブ幹の乾燥や保存作業に関係者の苦労が続いた。

■花博の展示へ向けて

4月8日に開幕して10日が過ぎた19日の花博覧会会場は、大勢の人びとで賑わっていた。そ



特大のチェーンソーによる切断作業を静岡市内の製材所で行った（和田秀樹氏、2004年5月13日撮影）。



6月20日に公開されたディディエバオバブの樹幹。現地では直径4m以上のものもある。
(提供：静岡新聞6月21日掲載写真)

の中で、展示関係者は、マダガスカルディディエバオバブの公開に向けての打ち合わせを行った。静岡大学グループは、すでに航空便で到着したテストピースの化学的実験結果を再度展開させ、今後の保存処理と展示方法を提案し、力のこもった討論が行われた。

マダガスカルバオバブの展示ブースは、オーストラリアバオバブ3本が植えられている国際庭園地区とした。マダガスカルは、かつてのパンゲア大陸をイメージさせるオーストラリア・インド・タイのブースに隣接させることになり、その準備を打ち合わせた。

私の分担は、マダガスカルブースにおける展示パネルの内容検討とパネル原稿の作成と決まった。まず広報用のチラシとポスターを作成する。続いて4枚のパネル「マダガスカル島—生物進化が見られる巨大な島」、**「マダガスカルバオバブ—バオバブ属の種類と分布域」**、「バオバブ—マダガスカル島から花博会場まで」、**「ムルンダバのバオバブ—生活・観光と科学」**で理解できるようにした。

清水港に到着したときの幹の高さは1.9m、直径は2.1mであり、その重量は約3トンと推定された。この資料を展示用として高さ1.6m、研究用として0.2mの幅に輪切りをすることとした。これだけ大きな幹を切断する機械はなく、大型のこぎり（チェーンソー）使い、一人は脚立に乗って、一人は下で支えての二人の人力で5

月13日に行なわれた。

次に、18日から3週間、製材所の木材乾燥釜に入れ、70～50℃で、時にはひび割れを防ぐために水蒸気を当てながら強制乾燥させた。6月8日からは自然乾燥に切り替えたが、樹液の流出はさらに続いていた。樹幹3トンの3分の2は水分と推定されていたからである。博覧会はすでに4月に開幕しているの、関係者は厳しい予算の中での展示作業で努力せざるを得なかった。

■バオバブの展示オープン

マダガスカル産バオバブ幹の公開日は6月20日に設定された。オープン当日は、来賓として在日マダガスカル大使館員の3名によって祝福され、マスコミにも大きく報じられた。関係者の長い努力が実った時である。

ブースには、木が生きていたときのように高さ1.6mの輪切りの標本が置かれ、木の断面を真上から観察できるように階段を取り付けた。それはあたかも大きな風呂桶のように見えた。そして、これを説明する4枚の展示パネルと静岡大学グループ作成の標本も展示された。

■花博覧会で300万人の脚光を浴びる

博覧会の期間中に500万人以上の来場者があり、マダガスカルバオバブが6月20日に展示されてから、およそ300万人が見学した。私



4か月間の会期中、およそ300万人の見学者がバオバブの展示を訪れた。樹の太さを上から確かめたり、木肌に触れたり、臭いを嗅いだりしていた。まるで大きな風呂桶のようだ...

たちも会場で見学者の声を聞いてみた。校外活動の中学生達は、幹の肌をなでたり、幹に顔を近づけて、特有の臭いを確かめていた。バオバブはキワタ科に属し、ドリアンの臭いに似ている。臭いを発していた樹液は、展示期間の後半には少なくなり、それに伴って乾燥し、輪切りの表面が少しずつ沈下していった。見学者で多かったのは女性で、バオバブ並木を見に行きたいという多数の声を聞いた。8月にはオーストラリアバオバブが開花したことも観客動員に花を添えた。

■博覧会を終えて

浜名湖花博の入場者は、目標の500万人を達成し、10月11日に閉幕した。職員と関係者は、展示物の後始末を行う中で、オーストラリアバオバブは浜松市のフラワーパークに移植が決まった。

マダガスカルのバオバブ樹幹標本は、NPO法人静岡自然史博物館ネットワーク（池谷理事長）に引き継がれ、静岡県埋蔵文化財調査研究所（静岡市清水区巴川）で保存処理後に、ネットワークが管理することになった。樹幹の保存作業は、昨年の暮れからポリアルコール置換の処理が始められた。

ディディエバオバブの樹齢の研究は、放射性炭素14の測定が開始された。ちなみに、直径

4.6mのアフリカバオバブでは1010年と報告されている。一方、成分の研究では、特有な臭いを発する成分は、バラやジャスミン、ココナツなどの甘い成分であるラクトン類が多く、虫を引きつけていることも判ってきた。杉や檜に含まれ、昆虫が逃げるテルペン類は少なかった。昨年6月から放映されたNHK番組の「巨樹は語る」で紹介されていたことだが、マダガスカルでは、バオバブの樹液を目薬に使っていたことは興味深い。また、この樹液には、シルバイトと呼ばれる塩化カリウムを成分とする鉱物が多量に含まれていた。バオバブ幹をつくる樹液は、大量の塩化カリウムをため込んでいるが、このカリウムをどこの地面や地層から濃集させているのか興味を呼び始めた。塩化カリウムは、海水にわずかしこ含まれていないので（バオバブニュース9号、2004年9月30日）。

このバオバブは、関係者の努力で新たな道を歩むことになった（バオバブニュース10号、2005年1月3日）。保存と活用には、アイデアと資金が必要であるが、アフリカの島で出会ったバオバブを、関係者を含めて温かく見守っていただきたい。

（かにえ やすみつ あーすコンサル）